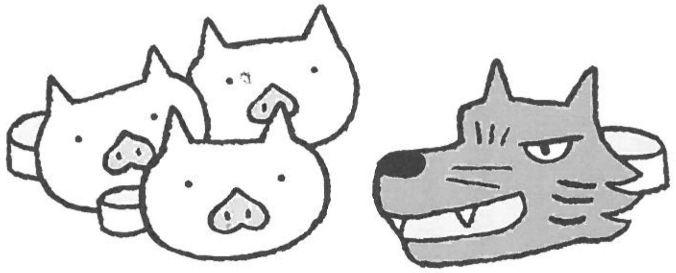
第5回 4歳児の仲間関係
～気持ちや行動をコントロールする力の育ち～



共立女子大学
河原紀子

かわはら　のりこ／早稲田大学人間科学部助手を経て、現在、共立女子大学家政学部教授。著書に『0歳～6歳 子どもの発達と保育の本』（監修・共著、学研プラス）、『子どもと食：食育を超える』（共著、東京大学出版会）など。

前回は、3歳児の仲間関係について述べました。3歳児は、お互いの意図や気持ちにズレが生じる場面で、自分の気持ちをきちんと相手に伝えたり、友だちの意見に応えることが難しく、泣いてしまったり、やりとりの過程で意図や要求があいまいになってしまうことが特徴でした。

それらの特徴は、4歳児になるとどのように変化するのでしょうか？　4歳児の仲間関係の特徴について、今回も保育園における子ども同士のやりとりの実際から考えたいと思います。

●友だちの意見を聞いて譲る

食事の際、どこに座るかをめぐってよくトラブルになりますが、4歳児のやりとりに変化が見られます。

【事例1】食事場面の席を決める

この日はまだ決まった人とペアになる「二人組」（途中から4、5人のグループになる）で座ることになっています。H子が先に自分の座りたい席にコップを置き、ご飯とおかずを運んでいます。しかし、二人組の相手であるK美は、別の席へコップを置いています。

何日か前にも、同じ理由でこの二人がもめていたことを知っているM香は、H子に「今度は譲ってくれるって言ってたじゃん、H子、約束守って」と言う。H子はそれにはなにも答えず、お汁をもらいに行き、自分の選んだ席に置きます。その後、K美の方を見てなにか考えている様子です。

少しして、H子はおかずやごはんなどをK美の隣の席に運びはじめました。

事例1では、H子はM香から指摘され、それについて少し考えた結果、K美の座りたい席に自ら移動しています。

このように、第三者の子どもの助言によって、一方が他方の要求・意見を受け入れ、子ども同士で問題を解決できるようになっていきます。

●話し合いのなかで意見を譲る

さらに、保育者に手とり足とりしてもらいながらも、子ども同士で意見を出して話し合い、一つの要求・意見に決めることにも挑戦しはじめます。その一つとして、グループの名前を決める場面が挙げられます。

今回紹介する事例では、「動物」のグループ名をなににするかを考えます。

【事例2】グループの名前を決める

保育者が希望を聞くと、S吉は「キリン」、C美「リス」、Y子「うさぎ」、K男「コアラ」とそれぞれ自分の好きな動物を挙げます。保育者はまずその動物を選んだ理由について、子どもに話してもらいます。その後、グループの名前を決めるには4人別々の意見から一つを選ばなければならないこと、どうしたら決められるかなどについて子どもたちに話します。

子どもたちは決め方について、最初は「並べばいい」「こしょこしょ（内緒話）で決めればいい」などと言い、実際に並んでみたり、内緒話をしてみたりしても決められないことに気づいていきます。

詳細は割愛しますが、話し合いの過程で、S吉やY子は「コアラがいい」と意見を変え、お腹に赤ちゃんがいる動物の話題になり、「カンガルー」という意見も出ます。

午前中40分以上話し合っても、決まらなかったので、話し合いはお昼寝前に再開することになりました。保育者は、他のグループは譲り合いで一つの名前に決めたことや、次に別の新しいグループになったとき、自分の選んだ名前になるかもしれないことなども伝えます。

お昼寝前、グループの名前を決める子どもたちは保育室に残るよう言われ、ほかの子どもたちはホールに移動しました。いざ話し合いをはじめようとすると、C美だけいません。保育者はホールへお昼寝に行ってしまったC美を呼びに行き、先生の話をきちんと聞くよう伝えて、話し合いを再開します。

C美は「リス」、残りの3人は「カンガルー」とそれぞれ希望を言い、保育者は「どうする？」と子どもたちに尋ねます。すると、Y子が「夏のとき、カンガルーにできるから、リスに代わってあげる」と言うと、K男も「譲ってあげる」と言いはじめます。

ここで保育者は、みんなで名前を決めるときにお昼寝に行ってしまったC美の名前になっていいの？　と問いかけます。つまり、「リス」でまとまりそうなところに、保育者はあえて異を唱えたのです。するとC美以外の3人は首をふり、Y子は「C美ちゃんが変わってくれればカンガルーになれる」と言います。そして、C美はリスからカンガルーに譲り、グループの名前は「カンガルー」に決まったのです。

子どもたちが次々「リスに代わってあげる」といいはじめたところで、みなさんならどのように対応するでしょうか？

名前などの決め方になにか正しい答えや方法があるわけではありませんから、どのような結論にもっていくのか、保育者は頭を悩ませることと思います。とはいえ、グループの名前を決める活動は1回だけでなく、5歳児になっても繰り返され、そのほかにも話し合ってなにかを決める場面は増えていきます。

そのような経験を積み重ねるなかで、譲ってもらったときのうれしい気持ち、自分が譲ったときの残念な気持ち、それだけでなく、そのおかげで決まったというある種の達成感も感じられるのではないかと思われます。グループでの活動には、折り合いをつけることの大切さについて学ぶ重要なチャンスがあると言えるでしょう。

●友だち関係と行動・感情のコントロール

近年、友だち同士の関係でトラブルになったり、障がいの診断はなくても、「ちょっと気になる子」や特別な支援の必要な子どもが増えているといわれています。

そのような子どもたちが特定の友だち、あるいは対等な友だち関係ができることと関連して、行動や感情のコントロールができるよ